



(講談社・1890円)

ネット社会の民主主義

「話せばわかる」と人は言う。しかし、「話しても分かり合えない」他者で世界は溢れている。私たちはこうしたジレンマを日々経験している。そこで「社交辞令」が生まれる。「話の通じない他人」とじっくり話し合うのではなく、適度に敬意を払ってやり過ごす技術である。無理に「本音」で話し合うことで、対立が顕在化し関係が険悪になる可能性はあるのだから、「空気」を読んで「建前」の付き合いに止めたほうが生産的である。この理屈はそれなりに説得力がある。しかし、こうした発想は自由な討議を基調とする「民主主義の理念」とは相容れないのかもしれない。ルソーを題材として、こうした問題に示唆を与えているのが本書である。著者は『動物化するポストモダ

ン』で一世を風靡した哲学者・東浩紀であるが、本書は単なる解釈書ではない。ルソーを通じて、情報化社会における民主主義の新しい様相―すなわち、直接的・自発的な対話が必要としない政治の模索―が提起されている。

換言すれば、本書は「熟議民主主義」論への応答なのである。噛み砕いて言えば、熟議民主主義論とは、多数決という民主主義の「結果」ではなく、話し合いという合意形成の過程に価値をおく考え方である。しかし著者に言わせれば、これは幻想に過ぎない。グーグルやツイッターといったメディアは「無意識の欲望のパターン」を示し、それによって敷居の低い、「ゆるい」政治参加を可能としている。本書の論じる新しい民主主義の可能性とは、こうした熟議に拠らない公論形成である。

民主主義には堅苦しい「パーティのドレスコード」のような趣がある。有権者は政策や候補者についてある程度精通していなければならないし、熟議という規範は「理性的」・「論理的」という作法を持たない者を「感情論」として排斥する。確かに「熟議」が要求される社会は窮屈かもしれない。他方で「ゆるい」政治参加はポピュリズムに陥りやすいのかもしれない。論争的ではあるが、閉塞した議会制民主主義に対しての鋭い問題提起である。

(九州大准教授・政治学 大賀哲)